

学長の初夢



日比谷 潤 子 ●国際基督教大学学長

坂 田 隆 ●石巻専修大学学長

濱 田 純 一 ●東京大学総長

司会

村 田 晃 嗣 ●同志社大学学長
インテリジェンスセンター広報・情報部門長

——敬称略——

村田 本日は、首都圏や地方といった大

学が立地する地域や大学の規模の大小、そして国立大学と私立大学と、それぞれ特性が異なる三つの大学の学長にお集まりいただきました。今回の座談会のテーマは「学長の初夢」です。社会のさまざまな機関、関係者から大学改革を求める声が強まる中、ご自身の大学で進められている改革や取り組みだけでなく、大所高所から理想的な大学のあり方、方向性など、まさに学長としての「夢」の部分を大いに語っていただきたいと考えています。

それではまず、日本の大学が特に対応を迫られている少子化問題について、先生方のご認識をお伺いしたいと思います。

少子高齢化、グローバル化のもとでも

画一化した社会のあり方を変えたい

日比谷 わが国における超少子高齢化の進展は、日々の生活の中でも実感するところですが、日本の大学における一番の問題点は、同じ年代の人たちがそろって入学し、卒業する、という画一性にあると思います。つまり、だいたい同じ年齢層の人々が大学



(2014年12月12日 私立大学連盟会議室にて)

に入学し、同じ時期に就職活動を行い、卒業後の四月一日から働きださなければおかしいという根強い考えがあり、私はこうした画一的な社会のあり方自体を変えたいという気持ちを強く抱えています。

最近、オックスフォード大学の関係者から、同大学では卒業時に就職先が決まっている学生は半分にも達していないが、それでも全く動じることなく、卒業してからさまざまな経験を積んだあとに進路を定めればよいというお話を伺いました。私も、日本の社会もそれぐらいの余裕があつていいと思います。

もう一つの問題点は、一度卒業して社会に出た学生が、ほとんど大学に戻ってこないことです。もし社会人が大学で学び直しをする動きが今以上に出てくれば、一八歳人口が減少しても、大学の経営的にはそれほど大きな問題にならないでしょう。今は、あまりにもターゲットが限られているところに大きな問題があると思います。

坂田 本学は人口がおよそ一五万人の都市である石巻市に立地しています。東日本大震災の前は一七万人強でしたから、震災

から三年半で二割近くも減少したことになります。この数値は住民登録をもとにしていますから、正確にはもっと減少しているかもしれません。実際に、休日の昼下がりだというのに、誰も歩いていない商店街もあります。それでもまだ石巻市はいいほうで、周辺にはより高齢化が進んだ地域があります。

世界のアジア、アジアの日本、 そして日本の地域社会を支える人材育成

坂田 人口減少が進んで、地域社会が成り立たなくなると、基幹産業である一次産業が衰退します。お米を作るのも、魚をとるのも、地域の集落がなければできません。本学の役割は、そうした地域社会を支える人材を育成することにあると、私は受け止めています。

人口が減少しているわけですから、一番簡単な解決策は、一人ひとりの能力を向上させることにあります。例えば石巻圏域は女性の進学率が三〇%台と、日本の平均よりはるかに低い数値にとどまっていますので、まずはその点を日本の平均ぐらいにま

で引き上げることができれば、状況は随分変わると思います。

さらに、日比谷先生がおっしゃったように、世の中に出てから、もう一度大学に戻ってくるという流れを促進したいと考えています。その意味では、職業を変えることへの障壁が下がってきていることは、大きなチャンスだととらえることができると思います。

濱田 世界を見渡した中で日本の大学をとらえ直すことも重要ですね。今、日本の大学はグローバル化という課題と向き合っていますが、日本という国が、アジアに位置している利点にもっと着目すべきだと思います。つまり、欧米だけではなく、もっと世界の多様な価値観を受け入れやすい位置にあるのだということを意識すべきだということです。少子化の問題を考えると、こうした日本のよさをベースにしながら、どれだけ世界、そしてアジアの学生を受け入れる教育ができるか、もっと真剣に考えるべきだと思います。

加えて、日比谷先生、坂田先生がおっしゃったように、一度仕事に就いた人たちを

もっと受け入れるという点も、とても重要です。

世代を超えた

「ミニニケーション道場」としての大学

村田 先生方が指摘されたように、年齢にかかわらず大学への入学者を増やすことは、大学の経営の観点ばかりでなく、若い学生にとっても意義が大きいと思われると思います。というのも、学生が卒業したあとに、ビジネスの世界で活躍するとしても、そこでお付き合いするのは、自分よりも年齢が上の人たちが圧倒的に多いことになります。少子高齢社会では、高齢者自体が大きなマーケットになるわけですから、早い段階からキャンパス内で、先輩たちとミニニケーションをとる機会をもつことは、若い学生たちにとっては大きなメリットとなります。一方、高齢者の方々にとっても、若い人たちと気持ち良くミニニケーションをとる手法やスキルを学ぶことができれば、世界は広がります。

その意味でも、大学が世代を超えた「ミニニケーション道場」のような性格を帯

びていけば、社会的な意義もより大きくなるのではないのでしょうか。

濱田先生からはグローバル化についての話がありました。これも少子化問題とともに、日本の大学が対応を迫られている課題の一つです。

グローバル化への対応策としては、学生の目を海外に向けさせて、外国に送り出すことも大事ですが、案外、日本の中の多様性ということに関心が払われていないように感じています。

例えば、東京で生まれ、東京の高校で学び、そのまま東京の大学へ進学し、東京にある大企業に入社する。そして、三〇代になって外国に駐在するまで東京しか知らないということになると、それで本当に世界のダイバーシティを理解することができのでしょうか。その意味では、日本の若者がもっといろいろな地域を知る機会を得たり、交流する機会を大学が提供することも必要でしょう。

それでは次に、グローバル化という問題に関して議論を深めていきたいと思います。現状では必ずしも、この問題に対するコン

センサスが確立しているわけではありませんが、どのように日本の大学は対応すべきか、ご意見をお聞かせください。

英語が話せず、海外で活躍しない 「グローバル人材」の育成とは

坂田 私はかなり保守的でカタカナ語は信じないので、正直「グローバル化」の意味をしつかり把握しているわけではありません。私なりに「グローバル化」を定義すると、日々の暮らしの中で、地球のさまざまな地域のことや頭に浮かぶ人は、まずグローバルな考え方の持ち主だろうと考えます。つまり、英語で話せるかどうかは、大きな問題ではないということです。

石巻の漁師は、ほとんどの方が外国語を話せません。しかし、船の中で働く人たちの半分以上は東南アジアなどの外国人であったりします。当然、食事は彼らに合わせて豚肉を使わないように配慮します。嵐が来ればみんなで身体を張って切り抜けます。そのようにして、普段からグローバル化の中で仕事をされています。

そうしたことも考え合わせて、私は二つ

のことが重要だと考えています。

一つは異なる文化、宗教を背景にもつ人とすり合わせをする能力を身につけることです。必ずしも互いの考えを一致させる必要はありません。しかし、何とか摩擦を起こさずに、しのいでいく能力が必要です。

もう一つは、自分の存在を明確に主張できることです。例えば、「自分の村にはこういうお祭りがある」という話ができるかどうかです。そうした視点がなければ根なし草になってしまいます。日本の地域間にも種々の文化や立場の違いがありますから、そこで学べることも大いにあるはずです。

その意味では、私は学生時代、非常にいいチャンスを得ることができました。当時、私はボート部に所属していて、シーズン中は全国からやってきた部員と合宿を行っていました。学部や年齢の異なる人たちと、毎日一緒にご飯を食べ、一部屋で寝るので。ときには、明治生まれの大先輩に理不尽なことを言われたこともありましたが、そうした経験を経るうちに「いろいろな人があるんだな」「でも、けっこう仲良くやっていける」という自信をもつことができました。

した。結果としては、とても効率がいい教育、実習の場だったように思います。

濱田 英語を話せたり、海外で活躍することがグローバル人材のように言われますが、私もそうではないと考えています。

坂田先生がおっしゃったように、グローバル化、国際化というのは、自分が生きてきた世界とは違った生き方や生活のスタイルに触れながら、ものの考え方や知識の身を相手とぶつかり合わせ、あるときは刺激を受け、あるときは反発する。そして、その中ですり合わせをし、いいものがあれば自分の中に取り込んでいく。そういう経験することだろうと思います。すなわち、国内外にかかわらず、自分が住んでいる地域、これまで生きてきた世界とは異なる経験をする、これが重要なのではないのでしょうか。

大学に在籍している間に、多くの人々と議論を重ねたり、世界にも出ていき、さまざまな経験をするのが大切で、自分と異なる人や考えにぶつかることによって、自分とは何か、自分の価値とは何かということも理解するようになると思います。

日比谷 潤子氏

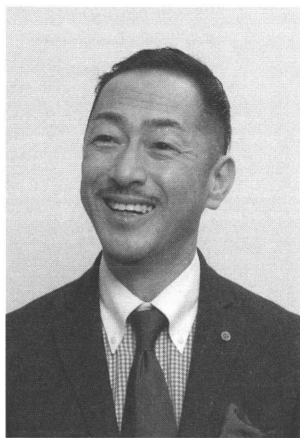


実際、そうした大学時代の経験を十分生かして、海外だけでなく、日本の地方で活躍する人も着実に増えていますね。

日比谷 同じことを言葉を換えて表現することになるとは思います。私はグローバル人材とは「自分とは異なる他者に出会うことによって、自分の立ち位置を位置づけ直すことができる人」だと考えています。その中で、自分のアイデンティティを確認したり、自分という存在を見極めることも重要だとは思いますが、同時に自分は変わりゆく存在、可変的な存在であるとの認識も大切だと思います。

実際、高校で多様な人に触れて、自分は

村田 晃嗣氏



こういう人間かなと定義したとしても、また大学に入って、多くの人たちと交流することによって、やはり自分の存在を再定義するようになる。そのようにして、昨日の自分は今日の自分ではない、そして明日の自分も違うというような、ある種の浮揚感のようなものを肯定的にとらえて、積極的にそれを楽しむ姿勢をもつことも重要ではないかと思っています。

大学が念頭に置くべき社会は「経済社会」のみにあらず

村田 グローバル人材にも、いろいろな定義があります。「産学官によるグローバ

ル人材の育成のための戦略」(平成二十三年四月、産学連携によるグローバル人材育成推進会議)では、「日本人としてのアイデンティティをもちながら、広い視野に立つて培われる教養と専門性を有した人材」という定義づけをしています。しかし、これでは始めから日本で育成するグローバル人材を日本人に限定してしまっている。

また、人間には、ナショナル리티の面でのアイデンティティがありますし、男性や女性といったアイデンティティもあります。あるいは職業や年齢など、さまざまなアイデンティティが重層的に構成されているのであり、そのように人間がもっているアイデンティティの多様性をもっと大切にしていかなければならないのではないかと考えます。

日本の人口減少に伴い、相対的に進む経済力の低下への対応として、グローバル人材の育成が強調されがちですが、私たちは必ずしも経済社会で貢献する人間だけを育てているわけではありません。

むしろ、これだけの可変性の大きい流動的な社会では、その部分に限定してしまう

と、長期的にはかえって経済社会への貢献をする人材も育てられなくなるのではないかと思います。その意味では人材育成を超えた視野をもつことも重要でしょう。

さて、ここまでは今後の大学において避けて通れない課題として、少子化、そしてグローバル化の問題について、先生方のお考えを伺いました。ここから先は、そうした重責を担わなければならないお立場をいったんお忘れいただき、もし、自分がこれから大学を創設するとしたら、どのような大学をつくりたいか、いかなるミッションを掲げられるかについてお話をお聞きたいと思います。

それでは、日比谷先生、もし先生が第二



坂田隆氏

の津田梅子（津田塾大学設立者）になるとしたら、どのような大学を目指されるか、お聞かせいただけますでしょうか。

「越境経験者を対象にした大学を、
『大学』ではなく『大学校』をつくりたい

日比谷 私 は自伝や評伝を読むのが特に好きで、津田梅子に関しては大庭みな子（小説家、津田塾大学卒業）が執筆した『津田梅子』という評伝を興味深く読んだ記憶があります。執筆に関する経緯もユニークで、一九八〇年代に、津田塾大学本館のある屋根裏部屋で、津田梅子がアメリカのホームステイ先のランマン夫人に書き送った大量の手紙が発見されます。そして、この



濱田純一氏

手紙を託された大庭みな子によって、評伝が書かれるきっかけとなりました。

これを読むと、津田梅子自身がさまざまな葛藤を抱いていたことがわかります。言葉に敏感な津田梅子は、この書簡の中で、「自分はどの言語で書くと、本当の自分の心情が吐露できるのだろうか」としたためるなど、煩悶している様子が書き記されています。

私は彼女のように、自分が生まれ育った場所を離れ、国境を越えてさまざまな経験をし、しかし帰ってきてなかなかうまくいかず悩んでいる人に格別の魅力を感じます。その意味でも、そうした「越境」の経験をもった人たち、具体的に言えば帰国生や留学生を中心とした新しい大学をつくってみたいという気持ちはあります。

ただ、そういう経験がない人に門を閉ざしてしまふことはよくないと思いますので、学内でもそういう「越境」の経験ができるカリキュラムを用意したいと思います。

坂田 私は大学ではなくて、「大学校」をつくりたいです。設置基準の制約を受けない教育機関を設立したいということです。

規模は小さいほうがいいですね。すばらしいスポンサーを見つけて、予算は青天井で、学生から学費をいただく必要もありません。選考は面接のみで、できれば一週間ぐらい合宿をして立ち居振る舞いから見て、入学者を選抜したいです。

教育を担う教員は、その存在がとても重要ですから、誰が見てもひれ伏すぐらいの、大教養人と言われる人材でなければいけないし、専門家としても優れた学者であることが理想です。そして、その先生が五人ぐらいの学生をつきつきりで教育する。要は弟子入りの世界で学ばせたいのです。

私は日本の芸能に興味があり、芸人の聞き書きをたくさん読んできました。彼らは師匠として、年限を限ることなく、日頃から弟子たちを教育します。とはいえ、教えることは少なく、本は与えるものの、勝手に勉強しなさいという世界です。そして、専門的なことは専門家のもとにお預けする。私はそういう教育が理想的だと考えています。

同時に、「三年間、生き抜いてこい」と、異文化の中に積極的に学生を放り込むこと

もしてみたい。これは文化人類学の世界で実践されていることで、そうされることで彼らは言語なども現場で覚えてきます。すると、著しく伸びるし、人間的にもチャージングに育つていきます。

芸人の世界では卒業という観念は薄いですが、区切りをつけるという意味では卒業させることは必要です。先生が学生を主観的に評価し、「これでよろしい」ということになったら、印可を与えて、そのあとは、師匠と対等の立場で扱います。ファカルティという言い方が適切かもしれませんが、ぜひこのような教育を展開してみたいものです。

目指すは教養ある イノベーターの育成

濱田 私としては二つの夢があります。

一つは、坂田先生は「大学校」とおっしゃいましたが、私も同じような意味で「塾」の形をとりたいと考えました。いわば大学という制度の枠をすべて取り払って学生を育ててみたいということです。期間はあまり長くなってよく、二年ぐらいが適当だと

思います。その間、濃密な人間関係の中で、何かを一方的に教えるというより、日常的に知と知がぶつかり合うような経験をさせたいです。

もう一つは、学部課程から大学院を含みこんだような、新しい大学院大学をつくってみたいと考えていて、その目的は教養あるイノベーターの育成です。教養教育の大切さが指摘されることがありますが、今の社会の中で、教養教育が本当に大切にされているかというと、どうもそのようには思えません。むしろ即戦力的な専門知識ばかりが求められており、これはおかしいと思います。

その一方で、今の日本社会の現状を考えると、新しい革新的なものを生み出す創造力をもった人々も育てる必要があります。すなわち、教養の基盤を強化すると同時に、先端的なものに飛び込んでいけるような、そういう人材を育成したいと考えています。その点、今の学部教育は、教養教育という面でも専門教育という面でも中途半端です。しかも、大学院に進んでしまうと、専門ばかりが重視され、教養が忘れられてし

まいます。だからこそ、それを一体化できるような大学院大学が必要だと考えます。

その場合の年限は、五年間の教育システムを構築して、半分は教養、半分は専門という形のカリキュラムで、修了者はPh.D.といった感じにしたいですね。

何かに熱中する人への 避難場所としての大学

村田 先生方のお話をお聞きしていると、いずれもサイズを維持しながら、きめ細かな教育を進めておられる小規模な教育機関をイメージされていらっしゃるように感じました。と同時に、日本の多くの大学の中には、そうしたきめ細かな教育をするには規模が大きすぎ、教える側も学ぶ側も少し不本意な点があるのではないかという点もあらためて感じた次第です。

私自身も大学をつくる機会があったら、やはり規模が小さな大学が理想です。さらに付け加えるならば、いくつかのドミトリをキャンパス内に設け、何十人かが一緒に生活できる全寮制の大学を開設したいと考えています。

ドミトリには、若いチューターを配置し、場合によっては夜遅くまで、ときにはお酒を飲みながら、学生たちと政治・経済などのテーマについて、幅広く議論できるような空間もつくりたいと思います。

また、その立地は、授業が終わったならアルバイトや遊びに繰り出すことができないような、人里離れたような場所がふさわしいのではないかと考えます。

アメリカの哲学者であるリチャード・ローティは、大学の機能の一つとして、「何かに熱中する人々に避難場所を提供すること」を挙げています。大学は、象牙の塔にこもって独りよがりになってはいけません。社会と積極的につながっていくことが必要ではありますが、同時に学生を社会の喧騒から一定期間守り抜く機能も不可欠です。

もし、大学からそうした機能が失われてしまいますと、大学が企業の下請け機関になってしまうと思います。こうした大学の機能についても、各先生方のお話を伺いながら、再確認することができました。

では、次にそうした理想の大学、教育機関にどのような入学者を受け入れるか、入

試形態も含めて、先生方のアドミッシヨン・ポリシーについてアイデアをお聞かせいただければと思います。

濱田 学生をどのくらい受け入れるかという規模感は考えなければいけません。が、「夢」ということでいわせてもらえば、地域社会とのつながりをより緊密にした受け入れを進めていきたいです。

この人材はこういう個性があるから、この大学で育ててほしいという形で、各大学の特性を意識しながら、地域社会から学生を送り出していただきたいということですから、それにより、大学というものが、地域の方々にとってもっと身近な存在になるのではないでしようか。

村田 戦前は、日本の各地域で篤志家が資金を支援したり、村の住民たちがお金を出し合うなどして、有為な人材を大学に送り出したりしてきた歴史がありました。そうしたコミュニティの力を生かした取り組みですね。

坂田 専修大学の創立者である相馬永胤、田尻稻次郎、目賀田種太郎、駒井重格の四人は、まさにそのようにしてアメリカに送

り出された人たちでした。いずれも出身藩であったり、徳川家であったり、さまざまな支援を受けて、アメリカの私立大学で八年間という長きに学び、帰国後、専修大学を創立しました。教育費用は莫大なものだったと思いますが、彼らをしっかりと支える人たちがいたおかげで実現できたのです。

濱田 今や地域コミュニティの衰退が全国的に顕著になってきていますが、それをもう一度つくり直すきっかけの一方策にもなればとの思いも抱いています。

大学で即戦力を養成できるほど 仕事は甘くない

坂田 大学に行きたい理由は、個々人が独自にもつていればいいと思います。実のところ、大学に行ってもそれほどのご利益はないかもしれません。しかし、大学で勉強をしたいから、大学がおもしろそうだから行く、そういう人にこそ大学に来てもらいたいです。もちろん、医師をはじめとした、明確な専門職を目指す場合は別です。その場合は、医学部に入って、医師という職業をストレートに目指せばいいわけです



が、多くの人はそのような明確なご利益を求めているわけではありません。

実際、ドイツやオランダなどの例を見ても、大卒だからといって、決して平均生涯所得は高くない。でもなぜ大学に行くかというと、それは勉強したいという思いによるわけです。

ただし、大学へ行っても、本当にご利益がないかという点、そんなこともありませぬ。もちろん、大学で四年間学んで、職場ですぐに活躍できるほど、仕事は甘いものではないですね。その意味では、「即戦力の養成」というのは幻想にすぎませんが、大学で経験を積むことで、新しい環境の中で、いろいろな知識を新たに学んでいける

素地をつくることはできるはずですよ。

では、大学ではどのようなことを教育すべきかということになりますが、私は古典教育に力を入れるべきだと思います。これまで、大学が象牙の塔と批判を受けたのはそれが後ろ向きの学問であつたからにほかなりません。次の時代を切り拓く人をつくるための古典学とは何かから考え直し、適切な古典教育を行えばいいと思います。

もう一点強調したいのは、私は学部生時代、ポर्ट部の活動に重きを置いたこともあって、かろうじて卒業しました。必ずしも優秀ではなかったが、きちんと働く、社会の多数を占める一般的な卒業生のことをよく理解したうえで、教育のあり方を考えるべきだということです。

濱田 私も大学院では懸命に学問に打ち込みましたが、学部生時代はそれほど熱心ではありませんでした。

坂田 私も大学院では熱心に勉強しましたが、学部時代はとても勉強したとは言えません。そんな私自身の経験から言わせてもらうと、大学で学んだことの一角が残れば大成功で、大半のことは忘れてしまうと

思ったほうがいいと思います。

つまり、大学はそうしたことも前提として入学者の選考のあり方を考えなければいけないということです。

その中で重要になるのは、大学での四年間を学ぶことで、学生がいかに変われるかどうかであり、大学はそこを見定めるべきではないでしょうか。その点で、指定校推薦は非常にいい制度だと思います。本学では、入学から就職までの追跡調査を行ったことがあります。指定校推薦で入学した学生の成長度は高いことが明らかになっています。

経年的評価と多様な形態による

アドミSSION・ポリシーの実践

日比谷 私立大学は、これまで推薦入学などを通じて多様な学生の受け入れを行ってきました。私もこうした幅のある受け入れのあり方は極めて重要だと思います。

世の中には、一回限りの試験で、最大限の力を発揮できる人ほど優れている、能力が高いといった考えが蔓延していますが、私はそれが不思議でしかたありません。試

験当日に体調を崩してしまう場合もあるでしょうから、経年的な評価をしながら大学に入学できるシステムをつくらなければいけないと私は考えており、推薦入試などの制度は、そのための方法の一つです。

同時に、現状では、大学へ進学することのできる層は、一定以上の収入がある家庭の出身者のほうが圧倒的に有利な状況になっており、経済的な問題によって大学に進学できない人が少なくありません。奨学金等の制度に関しても、もっと長期的な視点で考える必要があると思います。

このことと関連して、先ほど濱田先生から、昔のようにコミュニティで資金を融通したり、特待生を設けたりというアイデアが出されました。すばらしい試みだと思いますが、やはりそこから抜け落ちてしまう人も出てきてしまいます。中には都会の片隅で苦しんでいる志願者もいるかもしれません。そうした人々にも手厚い支援が行き届くようにしなければいけないと思います。このようなことも含めて、大学は時間をかけて選考するとともに、すべての志願者が教育費用を心配することなく進学できる

ような制度の構築をぜひ望みたいです。

村田 入試問題一つとっても、国際基督教大学は非常に工夫されていますよね。社会科学の問題でも、政治・経済と世界史の知識を関連づけて答えさせたり、統計的な理解が求められたり、さまざまな科目がうまく融合されていてとても興味深い入試問題を作成していらっしやいます。

実際に本学で取り入れるとすると、大変な手間がかかると思われますが、ぜひあのような出題ができたというのが、私の現実的な夢です。

現状の私立大学の入試でも、面接試験も含め、さまざまな試験の形態が導入されていますが、いわゆるペーパーの試験であっても、工夫しだいでかなりバリエーションをもたせることができるのではないかと思います。例えば、複数の科目を万遍なく評価するような通常のペーパー試験もあれば、科目数は少ない分、難解な試験問題もつく。そのようにして複数の試験問題を用意して、さまざまなパターンから入学できるようにする仕組みにすれば、今まで以上に個性的な学生を選考できるようになるのではな

いかと思います。

日比谷 せっかくお褒めいただいたので、補足して説明させていただくと、二〇一五年の二月には「総合教養（ATLAS）」という新入試科目の導入に伴い、新趣向の試験を実施します。具体的には、まず英語のリスニング試験の要領で、一五分程度、日本語による講義形式の音声スピーカーで流し、受験生はその内容に基づいた問題に答えます。本当は実際の講義を撮影した動画を流したいところですが、環境が安定しないということもあり、このような形にしました。そして、人文科学、社会科学、自然科学の論述を読み、それぞれの設問に解答するという形式であり、本学のウェブサイトでサンプル問題を体験することができますので、ぜひチャレンジしてみてください。

村田 それはとても興味深いお話ですが、どのような意図から、そのような試験を始めたのでしょうか。

日比谷 大学入学後は、講義を受けながら、ノートをとったり、情報をくみとったりしなければいけません。もちろん、本来

の授業のようなインタラクティブなやりとりとまではいきませんが、実際の講義に近づけた形で考查をしたかったというのが狙いの一つでした。さらに、ここで力を発揮できれば、入学後もスムーズに大学教育に入っていけるのではないかと考えもありました。

村田 私も実際にそのサンプル問題を解いてみたいと思いますが、ちなみにどのような内容なのでしょうか。

日比谷 講義問題の題材はワインで、ワインの歴史はもとより、世界史や政治状況、文学や自然科学など、関連した諸テーマを融合させた問題にしています。

村田 ワインがテーマの問題とはなかなかユニークですね。

日比谷 ワインをサンプル問題に設定するにあたっては、さまざまな議論がありました。特に、現状では回答する側のほとんどが未成年者なのに、問題のテーマを「お酒」にすることに對する懸念が多かったのですが、逆に多くの受験生が経験したことのないテーマであり、それゆえに想像力を必要とする。さらに、ワインはキリストの

血でもあります。サンプルの問題文では、アルコールの負の側面にも触れています。

学生を刺激し、 挑発するカリキュラムとは

村田 先ほど日比谷先生がおっしゃった経年的な学力を見ていくべきというお考えにも、私は大賛成で、入学後においてもその考えは大切だと思います。

というのも、学生はいつ学びのアクセルを踏むようになるかはわかりません。実際、二四、五歳になつて俄然伸びてくる学生もいますから、それに対応できるよう、つねにドアは開いておかなければいけません。それに加えて、初年次教育も重要です。せっかく難しい入試をくぐり抜け、難関大学に入学しても、それで満足してしまつて勉強をしなくなり、一年後には入学時よりも学力が大きく下がつてしまっている学生もいます。入学から一年を経過した段階で学力が低下した学生は、総じて卒業時の学力も低く、一年後に学力が上がった学生は卒業時の学力が高いという調査結果もあります。

したがって大学は、最初の一年にいか
勉強の習慣をつけさせるかを真剣に考え
なければいけません。その意味では、一年間
は仮入学という形にして、定期的に教員が
学生の状況や考えを面接するのも一つの方
策であり、そうすれば、多くの学生がまじ
めに勉強するのではないかと思います。

大学としては、学生をいかに刺激し、挑
発しながら、いい教育を提供するかが重要
になりますが、こういうカリキュラムの改
革があり得るのか、お聞かせいただけたら
と思います。

MOOCとは対極の生身の教員による教育

——実物 実技、実践、そして実感

坂田 これは私たちが心がけていること
でもありますが、生身の教員にしかできな
い教育をしたい、つまり、MOOC
(Massive Open Online Courses) のよう
な映像技術を用いた授業とは対極的な教育
を展開したいという思いをもっています。

私は本学開学以来の教員で、一度大学を
つくった経験があるわけです。そのときか
ら、いずれMOOCのような教育ツールが

広まるであろうことは予測していました。
優れた講義ビデオが各国語に翻訳され、利
用されるようになったら、私は失業するの
だろうかと考えていたのです。ただ、同じ
情報を伝えるにしても、私は生身の人間が
伝えるのと、情報ツールが伝えるのでは、
その効果は異なると信じています。何ごと
も実体験が大事です。

震災の状況をテレビの画面を通じて知る
よりも、やはり被災地を訪れるほうが、現
場の実態をより深く把握することができ
るはずであり、そうした実体験を重視した教
育をしたいとつねに考えています。

教育の方法については、古典的な座学の
講義でもかまわないと思いますが、映像に
負けないだけの中身と迫力をもつことがで
きるか否かが問われると思います。

カリキュラムをどのように組むかは非常
に難しい課題ですが、以前、学生の出身高
校別の成長を解析したことがあります。そ
の結果を見ますと、工業高校出身の学生は
伸びが目立ちました。考えてみますと、工
業高校では実習を大切にします。危険を伴
う実習もありますから、高い集中力を要し

ます。さらに、計算などをいいかげんにす
れば、歯車がかみ合わない、反応が起こら
ないなど、不具合が起こることを身体で理
解することもできています。工業高校出身
の学生は、すでに高校の時点でそうした訓
練を受けているのです。

理工系の学部では実習を行います。大
学らしい、集中力を伴う実習などが授業で
できないか思案中です。先ほど申し上げた
文化人類学者が行う「三年間生き抜いてこ
い」と、フィールドワークの現場に放り出
すようなことも有効かもしれません。

濱田

ベースとして座学のカリキュラム
の充実が必要ですが、実物に触れる、ある
いは実物をつくるということも重要です。
私自身、大学の施設の中で、最も好きな場
所の一つは、旋盤などの機械が一面に並ん
でいる工学部の工作室です。頭の中にある
知識が実物とどうつながるのか、特に入学
して間もない学生たちにぜひ経験をさせた
いと考えています。実感なくして、知識だ
けのまま教育を完結させてしまつては学生
の真の成長はありません。

本学では、平成二十五年度入学者から、

「初年次長期自主活動プログラム」をスタートさせました。これは、入学生が自ら申請して、一年間の特別休学期間を取得したうえで、学外においてさまざまな活動を経験するプログラムです。

実際、この制度を利用して、ヨーロッパの諸国を転々として本場の音楽を聴いたり、各国の有名建築物を見て回ったり、手で触れたり、学生たちは思い思いの経験をしています。大学は学生にそうした「本物を知る」機会をつくることも重要だと考えています。

もちろん、学ぶこと、研究することの面白さもぜひ感じてほしい。そして、とにかく単位などにかかわらず、とことん集中して勉強できる環境もつくりたいです。

日比谷 私も、実践を通して学ぶことは重要だと思います。本学では英文学を担当する外国籍の教員が、授業の一環でシェークスピア作品の一部を、学生たちに演技させたりしています。自分の身体を通して演技をすることで、初めて理解できることもあり、さらに、そこで関心をもった人は、現代的な新しい戯曲に触れたときに、その

経験を生かして作品を深く理解するようになるなど、こうした実践的な学びは極めて重要です。

本当に必要なものを厳選しつつ 社会との関わりをもった授業を

坂田 今、アクティブラーニングなど、最先端の授業や教育手法が進められていますが、全体の授業時間数が決まっている以上、こうした新しい教育に時間をかけすぎると、古典教育が満足に行えなくなってしまうということも考えなければいけません。その意味では、授業の自身を厳選する必要があります。大学には本当に必要なものをきちんと見定めることが求められているのではないのでしょうか。

本学に在籍された物理学の先生に、「普通に社会に出ていく学生は、どこまで物理学を学ぶべきでしょうか」と聞いたことがあります。すると、その方は、量子力学の専門家であるにもかかわらず、「古典力学と電磁気学で十分です」とおっしゃいました。ある意味では、そういう見切りをつけたカリキュラムをつくる必要があるかと思

います。

日比谷 全く同感で、私は本学の一般教育科目が総花的になりすぎているとの問題意識をもっています。つまり、学生に選択肢を与えすぎているということです。

もし、私たちが、「絶対これだけは学んでほしい」という観点で科目数を限定すれば、多くの学生が同じ経験を共有することができるようになりますし、付随して教室の配置も容易になります。

本学の初年次教育では、英語の基礎訓練を通してアカデミックスキルを学ぶことを目的として、一クラス約二〇名の「リベラルアーツ英語プログラム（ELA）」を展開しています。学生同士の絆も深まりますし、同じことを学ぶことでテーマについての議論も活発に行われており、そうした環境づくりは大切だと思います。

濱田 大学はキャンパスの中だけで教育するという発想をそろそろ捨て去るべきで、社会と連携して学生を育てるという方向に進むことが重要だと考えています。そのためにも、われわれの側も内に閉じこもらずに、社会を巻き込んで、学外で学生を積極

的に育てたいと考えています。

村田 社会を巻き込む形で教育することは非常に大事で、本学でも、宗教学を教える際に、キャンパスの中で学ぶとともに、本学が立地する京都という地理的な条件を生かし、寺社仏閣を巻き込みながら一緒に学んでいくのでは、教育効果という面でも大きな違いが出てくると思います。各大学が置かれているロケーションを生かしたカリキュラムも重要だと思っています。

さらに、デジタルネイティブという言葉もあるようですが、ネットに依存しがちな現在の学生たちを、一度その環境から遮断してみることも有効なのではないでしょうか。そうした機会をつくるために、どのような教育がふさわしいのか、今後の検討が必要ですが、ネット環境が全くない環境での合宿形式の学びの場をカリキュラムにも盛り込んでいきたいです。

それでは次に、そうしたカリキュラムのもとで社会に送り出すために、どのようなディプロマ・ポリシーをもつべきなのかという点に、話題を移したいと思います。まずこの点について、私自身の考えから述べ

させていただきます。

ディプロマ・ポリシーと 定性的評価への挑戦

村田 本学では教養教育の一部を英語で展開するプログラムをスタートさせようと検討中であり、その際は英語の授業を展開するだけでなく、プログラムの履修者については、大学卒業後も定期的に追跡調査を行っていくと考えています。

もちろん、すべての学生を追跡できるわけではありませんが、学生が社会に出てどのような活躍をしているか、どのような評価を受けているのかを、ある種の定点観測として、定量的にはなく、定性的に調査し、その結果を教育の改革にもつなげていければと考えています。

日比谷 今、「定性的」という言葉を使われましたが、これは非常に重要です。卒業に関して、通常は単位数という定量的なものから判断するのですが、定性的なレベルで考えることも必要ではないでしょうか。つまり、一人ひとりの学生が、大学にいる間にどのような変貌を遂げたか、何かしら

の形で、定性的に把握できるようにしたいということですね。

その観点から本学では、学生が書くエッセイを通して、成長を確認する機会を与えようと、二〇〇八年から「アカデミックプランニング・エッセイ」を導入しています。

まず、入学前の学生全員からエッセイを書いてもらい、併せて私たちが学生の意欲や状況を知るためにも、将来の志望メジャー（専修分野）を記入してもらいます。

次に、学生はこの入学前に書いたエッセイを年次ごとに振り返り、自分はどのように変わったのかを新たに書き込んでいきます。そして、卒業を目前にした段階で、大学生生活全体を振り返ってもらいます。

学生によって取り組み度合いに大きな差があるのは事実ですが、はじめに取り組む学生は、自ら学びのプロセスや成長を確認する貴重な機会となっています。

こういうことを実践する中で、学生たちには「自分は大学生活の中で、これだけのものを得た」と明確に主張できるようになった段階で、卒業してもらいたいと考えています。

濱田 まあ決められた単位数は修得して

ほしいという思いはありますが、先ほど申し上げたように、初年次には、海外に行くなり、国内で活動するなり、社会の中で存分に経験をしてもらいたいのです。それをしてないという場合は、一年間、死に物狂いで勉強してもらおう、学生たちにはそのどちらかを選択して、徹底してもらいたいと思っています。

それと、最近、懸念していることがあります。それは、昨今の教育改革を進めるに当たって、大学教育が親切すぎるものになっているのではないかとことです。本学でも以前に比べて手を掛けるようになってきていますが、果たしてこれが本当にいいことなのかという点について、改めて考えるべきではないかとも思っています。

実際、私たちの学生時代、そしてその前の時代を考えてみますと、大学はそんなに手を掛けていませんでした。それでも学生は自分で育っていきました。それは社会自体にも、若者を育てていく力があつたからなのでしょう。

現在のところ、学生に十分に手を掛ける

のは仕方がないにしても、これをこの先もずっと続けていくのではなく、いかに学生が自立できる環境をつくっていくか。それを社会と一緒に考えていくべきだと思います。

わかる^レを通じて^レかわる^レこと こそが大学の価値

坂田 私は入学式で必ず話すことがあります。それは、^レわかる^レということは、そのことによって自分が^レかわる^レ(変わる)ことを意味するのだということです。これは、阿部謹也先生(歴史学者、一橋大学名誉教授)が高校生向けに書かれた著書の中で述べられていることですが、私はこれに続けて、「もし、大学に入ってあなたが変わることができなかつたなら、四年間は無駄であつたということだ」と話して聞かせます。本学ではどのように変わったのかを、明確に表す仕組みはできていませんが、学生の成長、変化という点はやはり重視しなければなりません。

私の授業では、二度にわたって、「あなたはこの講義を受けて、どのように具体的

に変わりましたか」という点についてレポートを書いてもらいます。私は栄養学が専門ですが、例えば「ラベルを見て、食品を購入するようになりました」というように、どのような行動変容があつたかを実際に記入してもらうわけです。些細なことですが、その人の行動なり考え方を変えることができなければ、大学としての価値が問われるだろうと私は思います。

さらに、その結果として、学生たちには初めて出会うことに適切に対処できる能力を身につけてほしいと思っています。一〇〇%の対応は期待しません。しかし、七〇%の対応ができる能力はぜひ身につけてもらいたい。これについては、震災直後、本学の教職員が実際の行動で示してくれたと思います。

村田 最後に、理想の教員像、職員像はどうあるべきかについて、ひと言ずつお話しただきたいと思っています。

坂田 私は本学に入職したときに、初めて教養科目を担当しました。それまでは大学院の教育しか担当したことがなかつたので、このとき大ベテランの生物の先生に教

えを請う機会をもちました。するとその先生は「四〇年は通用する内容を教えてください」とおっしゃいました。就職し、その後定年を迎えて何をしようかと考えたときに指針となるような、長持ちする、普遍的な学問でないといけないという教えでした。

もう一つ、その先生が強調されたことは、学生の大半は生物学者になることはない。

でも生物学者と付き合ったり、部下にもち評価しなければいけないときも出てくるだろう。そのときに役立つように、生物学を勉強した人間はこういう考え方をすることである、ということを見せてあげることが私たちの役割だとおっしゃいました。

これは専門科目でも同じで、正直に自分の姿や思いを学生に示したほうがいいと私も思います。自分の研究分野はこんなにおもしろいのだということをつねに学生に伝えることで、学生たちも「どうやらおもしろそうだ」と思って、熱心に勉強するようになると思います。

さらに、教員はかりそめにも先生と呼ばれているわけですから、尊敬されるべきであるとも思っています。そのために、大

学教員に研究は欠かせません。教育專業というのにはあり得ないとも考えています。教員が懸命に研究を行っている姿を見せることで、学生も何かを感じてくれるはずです。

多様なパーソナリティあふれる 人材の確保と適切な配置

濱田 すべての教員が一律である必要は

ありません。研究ばかりやっている教員もいれば、教育熱心な教員もいる。多様な教員がキャンパスにいたることが、学生たちの刺激にもつながるのではないかと思っています。



そして、大学としてはそうした多様な教員たちのパーソナリティや、配置が学生にとってベストになるようにもつていくこ

とが大事だと思っています。

日比谷 私も教職員は多様であるべきだと考えています。さらに、私立大学の強みの一つは、建学の精神にあると思います。その解釈は時代を経て変わるものでもありますが、その大学がもっているある種の特質のようなものは、教職員が共有すべきだと思います。

確かに、個々の教職員のフィルターを通しますから、一つの結論が出ることはないかもしれませんが。皆でその大学の特質について議論できるような教職員集団をつくっていきたいとも考えています。

村田 今回は、新年号として、学長の初夢を語っていただくという新しい趣向の座談会でした。各先生方から非常に示唆に富む、希望のもてる、それこそ大所高所から夢のあるアイデアやご経験を語っていただきました。

大学が置かれている課題やその解決に向けた考え方が十分に示されたと思います。ぜひ、本日のご意見を、全国の大学改革にもご活用いただければと思います。本日はどうもありがとうございました。